奇說排問録 後集 一

特別
21
2460
7

門へ21
2460
12-7

尾定

孫子之禮既畢蹈青之樓云招梅
引橫窗驚聲起人代時也無消
遣之具則老或沉於游蕩行或
失於淫僻坐以科官之家子衒巧
小說之著曰說新然可涉怪誕者使
人心移司過絕妙者使人心溺六樹

圃翁所傳孫侯排悶錄十二卷去春
刊出未久世人漸及餘編矣要
恒追翁之閑讀之人為勸懲鞭
馬試手之際記以可必為標的互近
揣摩之微旨之所為規矩準繩答倦
繡之須視之人為砥礪非夫深文

好要安言亂教之類併前孫侯遺
本末則猶滄海數珠供在掌中豈
城兩劍之佩腰間不忘初衷未沈本末
六等卷我先考圃翁府君官餞譜也
不可以再序故題數行云文政丁亥
臘月立春之日俊齋大邦顧撰

奇說排門録後集總目次

卷七上

明斷之部
舟人呼商妻
詩讖
臙脂

奇說排門録卷之七上

明斷之部

舟人呼商妻

一商賈。旅商ひゐ行とく。裝載しく味爽ゐ。一人舟ゐ来やく。僕の来るを待居るが。久く待共僕至らぎ。舟人輜貨の多を見且一身ゆく僕も未至らぎ。殊ゐ地ハ辟寂ゐして外ゐ人も無やければ忽悪念を發し。今是を圖る良いと易し。と多ひ々急ゐ舟を艘出して其人を遂ゐ水中ゐ擠しく殺し。其輜貨を携へて帰やる。扨知らぎ顔つくりく。商家ゐ詣て慮く門を敲く向ひるゐ娘子何故館人ハ。船ゐ下やきのハざるや。と呼ばりければ商妻驚く人をして所在知らぎ。其僕ゐ問ゐ僕答く。

六樹園翁　譯

先程舟に到て尋つるに主人見えざるに帰りて来るとて夫より彼方此地尋訪けるども行方知れざる故地里に斯と告報けるに地里

れど卒に其状なし。其後縣令數人の訴を歴々るども遂に決まるる能はざ

に。斯て賢能の知縣至て此儀を結せんとて先商妻を召て人を屏け

て其妻に問て曰。當時舟人来て問ふ時の情状言語如何なるや。妻曰

夫出去て良久して。船家来て門を叩ぬ門未開ざるに遽しく呼て

申さく。娘子何故官人船に下らざると云ひて。外に何共云候はぬと答ふ。

知縣乃婦を退しめ舟人を召て問ふに答ふる所妻の云ふ所に符合せ

ず。知縣笑て曰。商を殺せる者は汝己に自其罪を白せり。他の證を須

る迄及ばずと云て舟人諱て服せず。知縣怒て曰汝来て門を叩く

時。主人を呼ばずして妻を呼て主人を問ふに汝が中に主人家に在ざるを

知る故なり。豈主人の家に在や否やを知らずして。尋ねるに主人を呼ずして。

其妻を呼者あらんや。汝速に情實を吐べし。と叱せば舟人驚て其

罪に服しぬ。遂に其法を正して刑に行ひ為。實に神明の政と謂つべし。

詩讖

青州の居民に范小山と云者。筆を販を業とせり。此頃旅商に行て四箇月

程に成ども。妻の賀氏獨空房を守て居るに。或微雨の降夜盗に殺さ

れり。何者の所為なるか知者なし。泥の中に扇一握遺て有。其扇に詩を書

たり。王晟と云者の書すて。吳蜚卿と云人に贈る詩なり。王晟は何許の人

と云事を知らず。吳蜚卿ハ益都ゆく。素封の人まく范小山と同里なり。平日頗佻達の行ある故。郡縣ゆゑ召捕へく。ぎんこ云々とぞ申ちざゆ〜ぐあまりも強く刑拷せ〜ま。遂ゆ誣く罪ゆおちろう。即十餘の官人の往復を歴けまぞ。更ゆ異幾無やくまび吳蜚卿も今ハ自必死と覚悟〜く田産を貨く贖斧ゆあてくゆ。或日陰ゆ少の賂を監者ゆ遺く鴆を市む。其夜の夢ゆ神人来りく告玉ふハ子死すると勿ま曩日ゆハ外邊凶ゆ〜ぐ。今ハ目下内邊吉ゆ〜ん。との玉ふと見く驚死覚ぬ再睡るゆ又同夢を見けまび。鴆を飲むゆ及止めく待居ゆ市〜ぐ幾程もゆく周元亮先生と云人是道の分守ゆく来りゆひ囚共を慮〜く吳蜚卿ゆ至ゆ。周元亮。先范小山ゆ問く曰。吳蜚卿ゆ人を殺をとゆ云ゆ何の憑據ある。時ゆ范小山彼扇を出〜く元亮ゆ見せ〜む。元亮扇を熟視く問く曰。王晟ゆハ何者ぞ。皆答て知らぎと曰〜けまび。元亮此一件の書付を細閲一遍〜く立所ゆ命〜く吳蜚卿ゆ械を脱せ〜ゆ。監ゆ出〜く倉ゆ移さる。是を見て范小山強く爭く。吳ハ蜚卿人を殺ゆ〜者ゆりと云けまび。元亮怒く曰。汝其罪をゆ正さず。一人を殺〜ぐゆまび便子とゆふや。實ゆ汝ゆ妻を殺せる讎人を沒て。甘心せんとハゆぞ居や。と叱やくまび。衆人皆元亮ゆ吳蜚卿ゆ私もると疑ひく。敢く復言ふ者ゆ〜。元亮即硃簽を標〜。役を遣〜く立所ゆ南部地名ある某の肆の主人を拘へ〜む。主人大ゆ懼まく其故を知らず。府ゆ至やくまび。元亮問て云。汝ゆ肆の壁ゆ東莞の李秀ゆ持わて。是何時題せ〜や。答く曰。舊歳提学の爰ゆ来やゆひ〜時。二三の秀才有く。酒を

呑く醉く留題せるより。住居ハ何里なるゝ知ず候ハぬと云々ゝ元亮遂
ゝ役を遣し。日照坐ゝ至て李秀を拘へ〳〵む。秀即至ず々ゝ元亮怒く
曰。汝既ゝ秀才と作る。奈何ぞ人を謀殺せるや。李秀錯愕く頓首し。但
覚えず〳〵と云けゝ。元亮扇を鄭下く曰。是扇を視よ。爾ゝ作る所ゝく
爾ゝ書なり。何故詭く王晟ゝ託るや李秀審ゝ此扇を視く曰。詩を
真ゝ小生ゝ作る所なり。字を寔ゝ小生ゝ書る所ゝ非ぎと云々ゝ元
亮云。汝ゝ書なる所ゝ非ざとゝ〳〵ども。既ゝ汝ゝ詩を知る者の書なる所なり。
必ず汝ゝ朋友なるべし。汝必此書を知らん。誰ゝ書なる者ぞ。李秀答て曰
行列の王佐ゝ筆跡ゝ似なり。と云元亮即時ゝ役を遣そ〳〵く。王佐を廟拘
〳〵む王佐至ずけゝ元亮大ゝ訶るる。李秀ゝ初く来り〳〵時の如く云

る。王佐大ゝ懼れくその所以を知らぬ。因て又扇を出し見せけゝ王
佐曰。此益都の鐵商張成と云者。某を頼く書せしなり。王晟ハその
表兄なるとゝいくりと申けゝ。元亮大ゝ喜く。盗此ゝ在と云く乃張成
を執〳〵む。張成至ずゝ々ゝ一訊〳〵く忽吐實し。其罪ゝ伏し〳〵り。初張成賀
氏ゝ顔色の美なるを窺見く。是を挑んと欲ども。不諧なんるゝ恐ゝ
吳蜚卿ハ佻達の人なゝ吳ゝ託し〳〵る人皆信とせんと念ひけゝ偽く吳ゝ
扇を為ず執行く諧ゝ乃自身の名を見し。不諧なゝ名を吳ゝ嫁く姙
去んと欲ひ。始くり實ゝ賀氏を殺さんと欲ゝ〳〵ざりゝり。然ゝども賀氏
剛氣なる生ゝ〳〵く。獨居常ゝ刃を持く自衛る。張成斯と知ぬ。垣越
踰く忍び入賀氏ゝ逼らんと云るを。賀氏既ゝ覚く張成ゝ衣を捉へ刀を

張成事を
吳蜚卿に
託しく賀氏
を斬ころす

摑く起上りて急に張成懼れて急に其刀を奪ひ取る。取られて取返さんとして足を。婦人の力奪ひ返を事成らず。又刃を脱るるも成ざる故大音ゆく蹄び足び張成甚窘く已むる能得ず。遂に賀氏を殺し扇を妻に娶去しぬる。吳蜚卿が三年の寃獄を周元亮一朝にして是を雪ぐ。明白に裁断あらしめ。寔に神明と稱せざる者なり。吳蜚卿此時先年の夢の告に内邊の吉と云周の字なる事を始て悟りぬ。然れども衆人の疑るいまだ解せざる。邑紳間を窺て問ひ周元亮笑て曰。是甚知り易しなり。細に爰書を閲るに賀氏が殺されしは四月の上旬に。殊に此夜。陰雨の天氣猶寒き時なり。扇をいとなる物に忙迫の時此不急物を携へて。累ひを増者あらんや。是其害を人に嫁せんとせしの察し知るべし。

郭向に南郭地名ゆく。雨に遇て避雨せる時壁に題せし詩を見るに。箕頭の持と口角相類せり。是故に何の憑據も無れども。妄度に先李秀を拘ぶめくるるなり。果して是に因て眞の盗を捕へ得たり。偶中なりと云べし。聞者歎服せり。

臙脂

東昌地名に牛醫を業とする。下翁と云者あり。一人の女を生て小字を臙脂と名付。此女才慧の人に勝れ一の美に非ず。容姿も又至て麗し。下翁寶の如くに愛する事限なし。佳壻を清門に求めんとのぞひける。世族の人に其寒賤を鄙め。締盟を成ざる。是故に十五六歳に及べ共いまだ緣づかず。然るに對戸の龔姓なる人の妻王氏と云者。挑脱して

善虐なりるが。朝夕の談友なく有る。或日王氏来りて例の如く。話して
帰りてるを女送て門際まで出る恰好美少年一人見て衣着て居る。門前
を過行る。其手柔甚都うけたび女の心少し動たるや。ありめる少年を
見やりけるが此少年も首を低れて趨行る。去る事既に遠けるを女も
凝眺居たりけるが。王氏其意を窺て戯れて。子の才貌を以て若人に
配するる能得べ實に十分なりんと云けるに女頬を暈紅にして一言を答へ
ず。王氏又問て云。此郎を識や王氏や否や女知らずと答へたび王氏又曰。
是南巷の鄂秋隼と云る秀才の父も孝廉に挙られし一人なり。妾向に
南巷に住せし時鄂家の郎なり。今丈夫死して其
喪未闋らざる故也。子如し意有べ。言を傳へて氷人となるべしと云けるを。

女更に言いたず。王氏も笑て帰りる。夫より女も晝夜鄂郎がる様
に恋慕て居たりるに。數日過けるに何の耗もなく。王氏も来ざりけるに
扨も官家の郎君の為に父の賤業を厭て。俯拾せざるやと疑ひて。今も
念の堪兼て食も進ず夜も寝られざるに遂に疾と成る。王氏ふと
来て省視せる上小語に成て曰。我夫貴販して未帰らず。依て鄂家
に言入る事なり。子の違和是故に非ざるやと云けるに女赤面して良
久くして。歎て云。妾既に懸念して妾の寒賤を嫌ざる即媒を以て言来べ。妾が疾も即愈へし。若私約なる
ば。不可と云けるに王氏頷て帰りる。扨此王氏も幼時より
鄂主の宿仆と云者と私通して生る。既に龔氏の婦と成て後も宿仆夫

の他出を偵る。輙ち好を尋ぬ。昼夜も宿外来りけるに。王氏女の言
しる所述べて笑ひ戯れ。且鄂郎が致意を囑しる。宿外も此女の美
なる事を久しく知りけるに。寄語が階無き恨を居ぬ。是話を交
して嬲が其機に乗じ〳〵と喜び王氏と謀らんと思ひ。彼と謀る
必ず拓む可〳〵と思ひ。假に無公の詞をなして。女の家の閨の辺に委く
尋ね問ふに公が収め。次の夜垣を踰て卞家に忍び入り。直ちに女の閨に
入る。指ちく窗を叩けば。内より女の聲にて誰そと問。宿外小語に
て鄂生と答ふ。女云妾が君を思ひ奉る。百年の久き我願ふ所。何ぞ今
宵一夕の歡を成さざる為なるや。君真成に妾を愛するにあらば速に
媒人を借て礼を正し〳〵迎へ来。若私合なるべ敢て命に従ひ奉らざ

と云けるに。宿外苦に纏腕を握り〳〵。後の信にせんと求む。女是を拒
難く〳〵疾を力く扉を啓れば。宿直に入て抱き着く。歡を求んと
云ふに。女驚て撲拒んとすれども。病體力無く〳〵地上に仆る。宿外是
を見て急に曳起し〳〵。女曰汝何くより来る悪少年ぞ。必鄂郎に非
し。鄂郎は温順なる。妾が病る由を知り。王氏ぞ必相憐恤べし。何故
に此の如く王暴なる我為王なんや。若猶今の如くせば便嗚呼〳〵。左
も必人に知らるん。若人に知らるべ品行虧損く。君も我も益なしとい
けるに。宿外も假迹の敗露んを恐れて。復強て言ずして但後會を請
けるに。女の曰。親迎を待王へと云ふ。宿外云。親迎は甚遠し。願くは近き日
を期せんと。借ふ女糾纏て厭く。左あらば病の癒る待王へと云ひ

けるに。宿の日数くべ信物を出せと云。女固く辭して許さざりけるに。宿の女の足を捉へて。繡履を解き持去る。女云。裏物已に君が身に入る。料るに必反して王氏。君若公員して妾を棄玉ひ妾但死せんのみと云を。空放く出ぬ。直に王氏の所に行き泊るに。履を忘れぬ。陰に衣袖を揣るに。因て衣を振て冥索けるに。王氏怪て何を尋玉ふと云。宿の已夏を以て寔情を告て燈を取て。遍く門外までも索めけるに。竟に見えず。爰に毛大と云者あり。巷中の生まれて游手無藉の者なり。嘗て王氏に懸想して挑けるに。王氏従ざるに。毛大怒て。宿の王氏に通ずるを疑。彼等二人が密事を見あらんと。王氏を窺へ。一夜居て。此夜来て其門を推ふに未扃ざるに。啓て潛に入て窗の下に到る時。奥なる紫帛の如き物を踏つけて。拾ひ視るに巾に包む女寫り。怪しと思ひ先懐に入れて。伏して聽に。宿の自述を。悉に喜ぶる限なり。抽身して潛に出て去る。斯て四五日を喻て。毛大夜墻を越て下家に忍び入しが。門戸の結構を悉ぐりけるに。誤て下翁が舍に指れり。下翁窗より窺ひ見るに。一人の男子来る。其音跡察るに女の所へ忍び来る者と知りけるに。刀を提て直に出る。毛大大に驚き反走る。下翁追懸て已に近く成りけるに。毛大急て逃る事成ざるに。刀を反して刀を奪ふ。此音に驚き媼も起上て大に叫びけるに。毛大かねてと覚悟して遂に下翁を殺して逃去りぬ。女も此喧を聞て起出て共に燭して見るに。翁の腦裂て言ふる成らず。俄頃に息絶ぬ。媼墻の

下ゆく繡履を沒く。能視るに臙脂の物。怪しく逼向けるに女隱すこと能はず。大ゐに哭しく寃情を告ぐ。問ふに其對戸なる王氏の名を生さるゐ忍び難。只鄂郎自來れりと云ふ。乃邑宰に訴へ出でば。邑宰役を差しく鄂生を拘へしむ。鄂生は其性謹慎にして。言詞温和なる者なり。今年十九歳ゐ成るが。常に客に對しては。羞渋事童子の如し。此夏は夢にも知らざる。執へられて大に駭き。魂を失ひ衙門に來り。堂に上りて詞を出さゞる成らず。惟戰慄しく居るを。邑宰錯りて認て。斯恐るゐは下翁を殺せるに疑ひ有りと察し。横に桔械を加へらる。鄂生は痛楚に堪ずして。遂に誣の服しぬ。其服極まるに亦邑宰の如く其情を察せず。鄂生冤塡塞て。毎に女と面質せんと願ひ居けるが。女に遇ふ時

に至て。女然憤に堪ずして。詬罵言けるに。鄂生は氣を奪はれ。舌結て伸ること能はず。一言の答も為ざるに。衆は鄂生に歸して。死罪に定まりぬる。往來の覆訊に數官を經たれど共異議なし。其後濟南地の夏某の妾一人。鄂生が風采を愛して人を殺す類の者に非ずと思ひ。甚疑へしく思ひ。陰に人を使はして。私に鄂生に問へしむるに。鄂生冤情を以て答へ。南岳已に鄂生が冤を知りぬ。先臙脂に問へ曰。汝訂約の後外に知者有や否や。女答へて曰。知る者無し。又曰。鄂生垣を踰へて入りし時。別に人の知るる有や否や。亦答へて曰。知る者嘗て無し。乃鄂生を喚上して。吳公問へるに。鄂生曰。曾て其門を過しし時。舊鄰の婦の王氏と。一の少女と門に在るを見て。某趙過侯に共並に

言も交ぜと云ふ。吳公女を叱く曰。汝適別ふ他人無ーと云ふ。何故ふ鄰婦を言ぶると云く。刑を用んとを女懼く曰。其時王氏側ふ在と雖。彼寔ふ關渉る事を。吳公命じく王氏を拘へーむ。王氏至ればく固く禁ーく女と通せーるぞ。吳公王氏ふ問く曰。卞翁を殺せる人誰人ぞ。王氏對て知候をぞと云ふ。吳公詰く曰。臙脂供言ふ卞翁を殺せる者ハ汝悉ふ知るやと云ふ。汝胡ぞ隱匿る哉得んや。王氏大ふ呼く曰。冤哉。淫婢。汝自男子を欲と。其時我媒合せんと云しふ。實ふ戲れと。彼自奸夫を引て院ふ入る。我何ぞ是を知らん。吳公細ふ詰王ひければ。王氏始鄂生が門前を過りーー時相戲れーー詞。前後具悉ふ供ーー。吳公又女を呼上て怒く曰。汝王氏を此事ふ與らざりーと云た。然るふ今王氏汝を取りちーと

いふ。何ぞや。女流涙ーーく答く曰。自己不消ふく父ふ慘死を致る是ふ。更ふ又他人を累るふ忍ぶ。願くハ相公察ーー王氏ふ問く曰。既ふ女ふ戲れーー後此事を何人ふ語ふ。王氏人ふ語ふ。曾て無と供と。吳公怒く。十指を梏せーと命ーー王ひければ。婦王氏已事を得ぎ寔を供ーーく。曾く宿ふと云者ふ告ふと云る。吳公立所ふ鄂生が械を釋き。速ふ宿ふを拘へーむ。宿ふ至く曾ふ知らざる由を供ーければ。吳公曰。諺ふ妓ふ宿る者を良士ふ非ずと云へり。汝既ふ王氏ふ此事を聞く。何ぞ知らずと云る哉得んと。嚴く械ーければ宿ふ遂ふ供ーく云。女の家ふ至りく女を賺せーるふ真ふと是有りとも。履を失ひーーる後ふ敢く復往ず。是故ふ卞翁の殺されーー情。寔ふ知らずと云る。吳

公益怒て厳く械に繫ぎ。宿外凌籍に堪へず。據て遂に自承し
ける。依て吳公招成を駁上し王に呈す。皆吳公を神と稱せざ
る。宿外も今の為方なく。唯首を延て秋決を待のみ。時に此頃学
使施公と云人。賢能の名有て。衆人皆施公を最と稱す。是に因て
宿外便宜を求めて。寃の狀を控て。施公其招供を討めて反覆疑思
して。案を拍て大に歎じて曰。宿外寃に寃なり。遂に院司に請
て。案を移して再鞫し王に。施公先宿外に問て曰。難へ何の呼に遺
して。宿外供して曰。其處を覚えず。共王氏が門を叩くのみ。袖中
に在し。施公轉王氏に詰て曰。宿外が外に奸夫幾人ある。王氏供して
曰。身宿外と雅齒なるの交合なし。未謝絶せず。其後も挑める者数
人非ずとなく。寔に從ずと云。施公因て其人の姓名を指言へ。
王氏供して云。同里の毛大屢挑け共固く拒て從はず。施公又問て曰。
汝が夫遠く出て久く帰らず。故に托して来る者無しや。王氏曰。有て。某
甲某乙皆借貸餽贈を以て二次妾が家に出入致せりと云。是皆巷中
の游蕩子なり。王氏に必有べし。未發言せざる者共。施公悉其者共
の名を藉て拘へしむ。既に皆拘へ集て。施公自引率て城隍廟に赴
き。盡く神前の案の前に平伏せしめ告て曰。曩夜夢に神人来て。我
に告て王を殺す者を汝等四五人の中に在と教へ。王に汝ら如ど
早く自首せば。寛宥して軽罪に處べし。と言聞せ。共皆同聲に覚
無しと供す。施公曰。汝等既に自招せざれば。神来て必指して王にべしと云て。

下翁の女臙脂。鄂秋隼を慕ひて大に禍を起す

吏人の命じて。龍或は褥を用て社殿の牖を悉く障塞ぎて暗黒なり。諸囚共を皆両祖せて。背を露はし暗中の驅入れ盆の水を入れて入れ。自盟はしめ訖て。瓮を壁下の繫て立しめ。戒て壁の向て動くなの無からしむ。且告て曰。神来て入て殺す者の背の字を書て云へしと云へ。せて戸を閉て少間して喚出し驗視て。毛大を指して曰。真の下翁を殺す賊なりと云て。毒刑を加へて遂の盡く其寃を吐たり。是の施公先人を城隍廟の便はしめて。壁の灰を塗しめ。又烟煤水を以て洗はしめ。人を殺す者の神来て。背中の字を書て玉かと云へる故の人を殺す者心中の是を懼れて。壁の向て跪しく背を壁の匿れ故の背中の灰色着て。又外へ出る時も猶恐れて手を以て故の烟色着たるを。施公

最初に毛大を疑しが。是謀て忽見えざる。毛大遂の其罪の伏して。此案已の結けぬ。施公判を書して。東昌の臣宰に贈る。其文の曰。

宿人祇縁両小無猜。遂野鶩如家雞之戀。爲因一言有漏。致得隴興望蜀之心。幸而聽病燕之嬌啼。猶爲王怯憐弱柳之憔悴。末似鶯狂而繹公鳳于羅中。尚有文人之意。乃刼香盟于幾底。寧非無賴之尤。蝴蝶過墻隔牖有耳。蓮花卸瓣隨地無踪。假中之假以生寃。外之寃誰信。是渾稍寛笞扑。折其己受之刑。姑降青衣開彼自新之路。毛大魄奪自

天魂攝干地浪楽搓木直入廣寒之宮逕泛漁舟錯認桃源之路遂使情火息焔慾海生波刀横直前投鼠無他顧之意冠窮安往急鬼生返噬之心風流道乃生惡魔温柔鄉何有此鬼蜮哉即斷首領以快人心臙脂身雖未字年已及笄爲因一綫纏縈致使群魔交至爭婦女之顔邑恐失胭脂惹鷙鳥之紛飛並名秋隼蔵雉自守幸白璧之無瑕縲紲苦爭喜錦衾之可覆嘉其入門之拒猶潔白之情人遂其擲果之心亦風流之雅事仰彼邑令作爾氷人

と書送りて邑令氷人となる。鄙生が為に委嬋娟遂に徴吹臙脂を鄙家に送る為とぞ。

尾定

奇說排門録巻之七上畢